



1A0456531 奈良絵本竹取物語 中巻





さとて思ひしところへかのもろこし舟きけ
 り。小野のふさもりまうできて、まうのぼると
 いふことをきゝて、あゆみとうするむまを
 もちてはしりせん。かへさせ給ふときに、
 馬にのりてつくしよりたゞ七日にまう
 で来る文を見るに言、ひねずみのかわ衣
 からうじて人を出してもとめてたてまつ
 る。今の世にもむかしの世にも此かはたは
 やすくなきものなりけり。むかしかしこ
 き天ぢくのひじり、此国にもてわたりて



やうき西の方へいりて、いづれか
てがねをひきしめて、いづれか
より、いづれか金すくなしとくし、つ
かひに申しかば、わうけいが物くはへて
かひたり。今、こがね五十両たまはるべし。
舟のかへらんにつけて、たびをくれ。もし
かね給はぬ物ならば、彼衣のしち返し
たべといへる事を見て、何おほす。いま、
かね少にこそあなれ。うれしくしておこ
せたるかなとて、もろこしのかたにむかひ

あやうき西の方へいりて、いづれか
てがねをひきしめて、いづれか
より、いづれか金すくなしとくし、つ
かひに申しかば、わうけいが物くはへて
かひたり。今、こがね五十両たまはるべし。
舟のかへらんにつけて、たびをくれ。もし
かね給はぬ物ならば、彼衣のしち返し
たべといへる事を見て、何おほす。いま、
かね少にこそあなれ。うれしくしておこ
せたるかなとて、もろこしのかたにむかひ

侍りける、西の山寺にありとき、および
ておほやけに申て、からうじてかい取てたて
まつる。あたいの金すくなしとくし、つ
かひに申しかば、わうけいが物くはへて
かひたり。今、こがね五十両たまはるべし。
舟のかへらんにつけて、たびをくれ。もし
かね給はぬ物ならば、彼衣のしち返し
たべといへる事を見て、何おほす。いま、
かね少にこそあなれ。うれしくしておこ
せたるかなとて、もろこしのかたにむかひ

て、ふしおがみたまへ。此かはぎぬ入たる
はこを見れば、くさくさのうるはしきるり
をいろえてつくれり。かはぎぬをみれば、
こんじゃうの色るりけのすゑには、こがねの
光しさゝやきたり。たからと見えうるはし
き事ならぶべき物なし。火にやけぬ
事よりも、けうちなる事かぎりなし。うべ、
うべ、かぐやひめ、このもしかり給ふにこそ
有けれとのたまひて、あなかしことて、は
こに入給ひてものゝえだにつけて、御身の

て人けりつ事いしゆりちせうもさるにあら
しきとゆふふふふふふふふふふふふふ
たれとせやふてふふふふふふふふふふ
いふふふふふふふふふふふふふふふ
大臣ふてふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

て、人のいふ事にもまけめ。世になき物なれば、
それをまことうたがひなく思はんとたまふ。
猶、これをやきて心みんといふ。おきな、それさ
もいはれたりといひて、大臣に、かくなん申といふ。
大臣こたへていはく、此かはは、もろこしにもな
かりけるを、からうじてもとめたづねえたりな
り。なにのうたがひあらんやきてみ給へと
いへば、火の中にうちくべてやかせたまふに、
めらくとやけぬ。さればこそこと物のかはな
りといふ。大臣これをみたまひてかほはくさのは

の色にて居給へり。かぐやひめは、あなう
れしとよろこびてあたり。かのよみのたま
ひける哥の返しはこに入て返す。

名残なくもゆとしりせばかはごろも

おもひのほかをきてみましを

とありける。されば、かへりいましにけり。

世の人／＼あべの大臣火ねずみのかは衣をも

ていまして、かぐやひめに住給ふとな。こゝに

やいますなどとふ。ある人の云かはは

火にくらべてやきたりしかば、めらくとや



けよしかば、かぐや姫、あひたまはずと
 いひければ、
 これをきって
 ぞ、とげなき
 ものをば
 あへなしと
 いひける。

ちのうのはな月のかゝるにせしむ
 ろうはくをわけてけつたひんきも
 おほいといふことて我がこじんはゆめ
 とりえて、歌よみわたりなりぬりそ
 こころの情を語りてももうわね
 踏ぐればあまえさすくらわらぬ
 のこまりいつらむものゆゑにらん
 かへいあんをわらすひさを——
 まふとまわりわたりておれど
 かげり　あらはれしみの歌はこころ

くひものに、殿の内のきぬ、わた、ぜになど、ある限り取出して、つかはす。此人／＼ども帰るまで、いもゐをして我はをらん。此たまとりえでは、家にかへりくなとのたまはせたり。をの／＼仰うけ給はりてまかりぬ。

龍のくびのたま取えずは、かへりくなとのたまへば、いづちも／＼あしのむきたらんかたへいなんず、かゝるすき事をしたまふ□としりあへり。給はせたる物、をの／＼わけつ□取。あるひはおのが家にこもり居、



まうせして、ひとりあかしくらした
 まひ、つかはしし人は、よるひるまち
 たまふに、
 としこゆる
 まで音も
 せず。

まうせして、ひとりあかしくらした
 まひ、つかはしし人は、よるひるまち
 たまふに、
 としこゆる
 まで音も
 せず。

ふりてあつていしものゝてそと後
二人つゝつゝてやれとあつて難波
の邊におはしまして、とひ給ふ事は、大伴の
大なごんの人や、舟にのりて、たつころして、
そがくびのたまはとれるとやきくと
とはするに、舟人こたえていはく、あやしきこ
とかなとわらひて、さるわざする舟もな
しとこたふるに、をぢなき事する舟
人にもあるかな、えしらでかくいふ、とおぼし
て、わが弓のちからは、たつあらば、ふといこ

給して、くびの玉はとりてん。をそくくるやつ
ばらをまたじとの給ひて、舟に乗て、海ごと
にありき給ふに、いと遠くて、つくしの方の
海にこぎ出給ふぬ。いかゞしけん、はやき風
吹、世界くらがりて、舟をふきもてありく、い
づれのかたもしらず。舟を海中にまかり
入ぬべくふきまはして、波は舟にうちかけてつゝ
まき入、神は落かゝる様にひらめきかゝ
るに、大納言はまどひて、まだかゝるわびしき
め見ず。いかならんとするぞとの給ふ。かち取

心もとながりていとしのびてたゞとねり
二人、めしつぎとしてやつれたまてて、難波
の辺におはしまして、とひ給ふ事は、大伴の
大なごんの人や、舟にのりて、たつころして、
そがくびのたまはとれるとやきくと
とはするに、舟人こたえていはく、あやしきこ
とかなとわらひて、さるわざする舟もな
しとこたふるに、をぢなき事する舟
人にもあるかな、えしらでかくいふ、とおぼし
て、わが弓のちからは、たつあらば、ふといこ

ろして、くびの玉はとりてん。をそくくるやつ
ばらをまたじとの給ひて、舟に乗て、海ごと
にありき給ふに、いと遠くて、つくしの方の
海にこぎ出給ふぬ。いかゞしけん、はやき風
吹、世界くらがりて、舟をふきもてありく、い
づれのかたもしらず。舟を海中にまかり
入ぬべくふきまはして、波は舟にうちかけてつゝ
まき入、神は落かゝる様にひらめきかゝ
るに、大納言はまどひて、まだかゝるわびしき
め見ず。いかならんとするぞとの給ふ。かち取

ろろへしやあらぬのうてはうわわ
 へくは海うろはぬふちとんをこ
 ろろへしやあらぬのうてはうわわ
 へくは海うろはぬふちとんをこ
 ろろへしやあらぬのうてはうわわ
 へくは海うろはぬふちとんをこ

こたへて申、こゝら舟にのりてまかりありくに、まだかゝるわびしきめを見ず。み舟、うみのそこにいらずは、神おちかゝりぬべし。もし、さいはひに神のたすけあらば、南海にふかれおはしぬべし。うたてある主のみもとにつかうまつりて、すぐろなるしにをすべかめるかなと、梶取なく大なごん是を聞て、の給はく、ふねに乗てはかち取の申事をこそ、高き山とたのめなど、かくたのもしげなく申すぞと、あをへ

[illegible]

きつき、ふし給へり。舟にあるをのこども、国につげたれども、国のつかさまうでとぶらふにも、えおきあがり給はで、ふなぞこにふしたまへり。松原に、御むしろしきて、おろしたてまつる。その時にぞ、南海にあらざりけり、とおもひて、からうじておきあがり給へるを見れば、風いとおもき人にて、はらいとふくれ、こなたかなたの目には、すもゝを二つけたる様なり。是をみたてまつりて、その国のつかさもほうゑみたる。国に仰給て、たごし

[illegible]

たらましかば、又、こともなくわれはがいせられなまし。よくとらへずなりにけり。かぐやひめてふおほ盗人のやつが、人をころさんとするなりけり。家のあたりだに、いまはとをらじ。男どもも、なありきとて、家にすこしのこりたりけるもの共は、たつの玉をとらぬ者共にたびつ。是を聞て、はなれ給ひしものの上は、かたはらいたくわらひたまふ。いとをふかせつくりし屋は、とびからすのすに、みなくひもていにけり。世かいの



人ひけるは、大ともの大納言は、たつの
くびの玉とりておはしたる、いな、さもあら
ず。御まなこ二にすもゝのやうなる玉をぞ
そへていましたるといひければ、あな、た
べがたといひけるよりも、世にあはぬ事をば、

あな、たへがた

とはいひ

ける。

はじめ

人のいひけるは、大ともの大納言は、たつの
くびの玉とりておはしたる、いな、さもあら
ず。御まなこ二にすもゝのやうなる玉をぞ
そへていましたるといひければ、あな、た
べがたといひけるよりも、世にあはぬ事をば、

あな、たへがた

とはいひ

はじめ

ける。

中納言いふれうしれまゝあつておはし
るゝをのこどものもとに、つばくらめ
の、すくひたらば、つげよとのたまふを、
うけ給はりて、なにのやうにかあらん
と申す。こたへての給ふやう、つばくらめ
のもたるこやす貝をとらんれうなりと
のたまふ。をのこどもこたへて申す、つばく
らめをあまたころしてみらだにも、はらに
なきものなり。たゞし子うむ時なん、いかで
かいだすらんと申す。人だにみればうせぬと

やふ人のやうなうかいはるれうか
しと申す。おはしれまゝあつておはし
るゝをのこどものもとに、つばくらめ
の、すくひたらば、つげよとのたまふを、
うけ給はりて、なにのやうにかあらん
と申す。こたへての給ふやう、つばくらめ
のもたるこやす貝をとらんれうなりと
のたまふ。をのこどもこたへて申す、つばく
らめをあまたころしてみらだにも、はらに
なきものなり。たゞし子うむ時なん、いかで
かいだすらんと申す。人だにみればうせぬと

中納言いそのかみのまろたかの家につ
かはるゝをのこどものもとに、つばくらめ
の、すくひたらば、つげよとのたまふを、
うけ給はりて、なにのやうにかあらん
と申す。こたへての給ふやう、つばくらめ
のもたるこやす貝をとらんれうなりと
のたまふ。をのこどもこたへて申す、つばく
らめをあまたころしてみらだにも、はらに
なきものなり。たゞし子うむ時なん、いかで
かいだすらんと申す。人だにみればうせぬと

申。又、人の申やう、おほいづかさのいひか
しぐ屋のむねに、つくのあなごに、つば
くらめはすをくひ侍る。それに、まめならん
をのこ共をひてまかりて、あぐらをゆひあ
げて、うかゝはせん、そこのつばくらめ、子を
をむまざらむや。さてこそとらしめた
まはめと申。中納言、よろこび給ひて、おかし
き事にもあるかな。もつともしらざりけり。
けうある事申たりとのたまひて、まめな
るをのこども廿人ばかりつかはして、あなゝ

おぼしめされぬやうなふりをして、
さういふて、こやすのかいとりたるかと
とはせ給ふ。つばくらめも、人のあまたの
ぼり居たるに、おちて、すにものぼりこず。
かゝるよしの返事を申ければ、聞たまひ
て、いかゞすべきとおぼしわづらふに、彼つか
さの官人、くらつ丸と申おきな申やう、こ
やすがいとらんとおぼしめさば、たばかり申
さんとて、御前にまいりたれば、中納言ひたひ
をあはせて、むかひ給へり。くらつ丸が申やう、

こつばくらめこやす貝は、あしくたばかり
てとらせ給ふなり。さては、えとらせ給ばし。
あなゝひに、おとろくしく廿人上りて侍れ
しやうとて、いまもて、こもせさるゝやう
に、さういふおぼしめを、あらて人みな
さういふて、おぼしめし、人一人をあらこに
のせすへて、つなをかまへて、鳥の、子うまん
間に、つなをつりあげさせて、ふと、こやすが
いととらせ給ひなば、よかるべきと申す。
中納言のたまふやう、いとよき事かなとて、

ひにあげすへられたり。殿より、つかひ隙
なく給はせて、こやすのかいとりたるかと
とはせ給ふ。つばくらめも、人のあまたの
ぼり居たるに、おちて、すにものぼりこず。
かゝるよしの返事を申ければ、聞たまひ
て、いかゞすべきとおぼしわづらふに、彼つか
さの官人、くらつ丸と申おきな申やう、こ
やすがいとらんとおぼしめさば、たばかり申
さんとて、御前にまいりたれば、中納言ひたひ
をあはせて、むかひ給へり。くらつ丸が申やう、

このつばくらめこやす貝は、あしくたばかり
てとらせ給ふなり。さては、えとらせ給ばし。
あなゝひに、おとろくしく廿人上りて侍れ
ば、あれてよりまうでこず也。せさせたまふ
べきやうは、此あなゝひをこぼちて、人みなし
りぞきて、まめなんらん一人をあらこに
のせすへて、つなをかまへて、鳥の、子うまん
間に、つなをつりあげさせて、ふと、こやすが
いととらせ給ひなば、よかるべきと申す。
中納言のたまふやう、いとよき事かなとて、

あなをひをこぼち、人みなかへりまうで
きぬ。中納言、くらつ丸にのたまはく、つば
くらめはいかなる時にか子をうむ、としり
て、人をばあぐべきとのたまふ。くらつまろ
申様、つばくらめ子をうまんとするときは、
尾をさゝげて、七度めぐりてなん、うみおとす
める、さて、七度めぐらんおり、ひきあげて、
そのおりやすがいはとらせ給へと申す。
中納言、よろごひ給て、万の人にもしらせ
給はで、みそかにつかさにいまして、をのこ

北は中納言、よろごひをひるになして、とら
しめ給ふ。くらつ丸かく申すを、いいといたく
よろこびて、の給ふ、こゝにつかはるゝ人にも
なきに、ねがひをかなふる事のうれしさ
とのたまひて、御ぞぬぎてかづけたまふ
つ。さらに、よさき、此つかさにまうでことの
たまふて、つかはしつ。日くれぬれば波
つかさにおはして、み給ふに、まことに、つ
ばくらめすつくれり。くらつまろ申す
やう、をうけてめぐる。あらこに人をのせ

あなゝひをこぼち、人みなかへりまうで
きぬ。中納言、くらつ丸にのたまはく、つば
くらめはいかなる時にか子をうむ、としり
て、人をばあぐべきとのたまふ。くらつまろ
申様、つばくらめ子をうまんとするときは、
尾をさゝげて、七度めぐりてなん、うみおとす
める、さて、七度めぐらんおり、ひきあげて、
そのおりやすがいはとらせ給へと申す。
中納言、よろごひ給て、万の人にもしらせ
給はで、みそかにつかさにいまして、をのこ

共の中にまじりて、よるをひるになして、とら
しめ給ふ。くらつ丸かく申すを、いいといたく
よろこびて、の給ふ、こゝにつかはるゝ人にも
なきに、ねがひをかなふる事のうれしさ
とのたまひて、御ぞぬぎてかづけたまふ
つ。さらに、よさき、此つかさにまうでことの
たまふて、つかはしつ。日くれぬれば波
つかさにおはして、み給ふに、まことに、つ
ばくらめすつくれり。くらつまろ申す
やう、をうけてめぐる。あらこに人をのせ

おほゆれど、こしなんうごかれぬ。されど、こやすがいふとにぎりもたれば、うれしくおぼゆるなり。まづしそくをして、このかい、かほ見んと、御ぐしもたげて、御手をひろげ給へるに、つばくらめのまるをけるふるくそを、にぎりたまへるなりけり。それを見たまひて、あな、かいなのわざやとのたまひけるよりぞ、思ふにたがふ事をかいなしといひける。かひにもあらず、と見たまひけるに、御こゝ

ちもたがひて

かさびつ

ふたに、入られ

給ふべくも

あらず、御腰は

おれに

けり。

おほゆれど、こしなんうごかれぬ。されど、こやすがいふとにぎりもたれば、うれしくおぼゆるなり。まづしそくをして、このかい、かほ見んと、御ぐしもたげて、御手をひろげ給へるに、つばくらめのまるをけるふるくそを、にぎりたまへるなりけり。それを見たまひて、あな、かいなのわざやとのたまひけるよりぞ、思ふにたがふ事をかいなしといひける。かひにもあらず、と見たまひけるに、御こゝ

ちもたがひて、

かさびつの

ふたに、入られ

給ふべくも

あらず、御腰は

おれに

けり。



中納言は、いくいたるわざしてやむこ
 とを、人にきかせじとしたまひけれど、
 それをやまひにて、いとよはくなり
 たまひにけり。かひをえとらずなりにける
 よりも、人のきゝわらはん事を、日にそへておもひ
 たまひければ、たゞにやみしぬるよりも、人きゝ
 はづかしくおぼえ給ふなりけり。これを、かぐ
 やひめきゝて、とぶらひにやるうた
 年をへて波立よらぬすみの江の
 まつかいなしときくはまことか

中納言は、いくいたるわざしてやむこ
 とを、人にきかせじとしたまひけれど、
 それをやまひにて、いとよはくなり
 たまひにけり。かひをえとらずなりにける
 よりも、人のきゝわらはん事を、日にそへておもひ
 たまひければ、たゞにやみしぬるよりも、人きゝ
 はづかしくおぼえ給ふなりけり。これを、かぐ
 やひめきゝて、とぶらひにやるうた
 年をへて波立よらぬすみの江の
 まつかいなしときくはまことか

とありては、まゝいといふやうに
らにあらうて人なれども、せ
くもきこふやうに、いふま
かゝるくわうの地をわたりて
ふぬる命をすくひやせぬ
と書つるあはれ入給ひぬ。是をき
くや姫、少あはれとおぼしけり。そ
よりなん、すこしうれしき事をば、か
ありといはひける。さて、かぐやひめ、か
ちの世に似ず、めでたき事を、みかど

まゝいといふやうに、いふま
らにあらうて人なれども、せ
くもきこふやうに、いふま
かゝるくわうの地をわたりて
ふぬる命をすくひやせぬ
と書つるあはれ入給ひぬ。是をき
くや姫、少あはれとおぼしけり。そ
よりなん、すこしうれしき事をば、か
ありといはひける。さて、かぐやひめ、か
ちの世に似ず、めでたき事を、みかど

とあるを、よみてきかす。いとよはきこ
ろに、かしらもたげて、人にかみをもたせて、
くるしき心ちに、からうじてかき給ふ。

かひはかくありける物をわびはて、
しぬる命をすくひやはせぬ

と、書はつる、たえ入給ひぬ。是をき
かぐや姫、少あはれとおぼしけり。それ
よりなん、すこしうれしき事をば、かい
ありといはひける。さて、かぐやひめ、か
ちの世に似ず、めでたき事を、みかど

きこしめして、内侍なかとみのふさこに
の給、おほくの人の身を、いたづらに
なしてあはざる、かぐやひめは、いかばかり
の女ぞと、まかりて見てまいれとの給ふ。
ふさこ、うけ給はりてまかれり。たけとりの
家に、かしこまりて、しやうじいれてあへり。
女に、内侍の給ひ、仰事に、かぐやひめ
のうちいうにおはすなり。能見てま
いるべきよし、の給はせつるになん、参り
つるといへば、さらば、かく申侍らんといひて、

入ぬかぐやひめに、はや、かの御つかひにたい
めんし給へといへば、かぐやひめ、よきかたち
にもあらず。いかでかみゆべきといへば、う
たてもなたまふかな。御門の御つかひをば、
いかでかをろかにせんといへば、かぐやひめの
こたふるやう、御門のめしてのたまはん事、
かしこし共おもはずといひ、てさらに見ゆ
べくもあらず。むめる子のやうにあれど、
いと心はづかしげに、をろそかなるやうにいひ
ければ、心のまゝにもえせめず。ないしのもと

よふと出て口おしく、このおさなきものは、
こはく侍るものにて、たいめんすまじきと
申。ないし、かならず見たてまつりてまい
れ、とおほせごとあり

つるものを

見奉らでは、

いかでか

かへり参らん。

入ぬ。かぐやひめに、はや、かの御つかひにたい
めんし給へといへば、かぐやひめ、よきかたち
にもあらず。いかでかみゆべきといへば、う
たてもなたまふかな。御門の御つかひをば、
いかでかをろかにせんといへば、かぐやひめの
こたふるやう、御門のめしてのたまはん事、
かしこし共おもはずといひ、てさらに見ゆ
べくもあらず。むめる子のやうにあれど、
いと心はづかしげに、をろそかなるやうにいひ
ければ、心のまゝにもえせめず。ないしのもと

にかへり出で、口おしく、このおさなきものは、
こはく侍るものにて、たいめんすまじきと
申。ないし、かならず見たてまつりてまい
れ、とおほせごとあり

つるものを。

見奉らでは、

いかでか

かへり参らん。



國王れおほせ事を、まさになせに世に住
 たまはん人のうけたまはりたま
 はでありなんや。いはれぬこと、なした
 まひそと、ことばはちしくいひければ、
 これをきゝて、まして、かぐやひめ聞べ
 くもあらず。國王のおほせ事をそむか

ばや、ころして

給てよかし

といふ。

國王のおほせ事を、まさになせに世に住

たまはん人のうけたまはりたま

はでありなんや。いはれぬこと、なした

まひそと、ことばはちしくいひければ、

これをきゝて、まして、かぐやひめ聞べ

くもあらず。國王のおほせ事をそむか

ばや、ころして

給てよかし

といふ。









